社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第27号　2015（pp.61-70）

社会空間の変容を捉えさせる小学校社会科授業開発

－第３学年地域学習 単元「梨農家ではたらく人々（筑西市関城地区）」の場合－

Developing a Social Studies Lesson Plan to Promote Elementary Scholers' Understanding of the Changing Social Environment: A Case Study of Community Studies for the Third Grade "People Working for a Pear Farm in Sekijo Town, Chikusei City"

佐　藤　克　士
（共栄大学／兵庫教育大学連合大学院）

Ⅰ　問題の所在

近年，学習対象となる「地域」を所与のものではなく，生産されたものであると捉えさせる社会科地理教育の重要性が指摘されている[1]。このような指摘は，例えば地理学や社会学など，空間の変容や空間相互の関係性を扱う分野において，空間を所与のものと捉えず，発生，変化したり，互いに影響を与えたりするものとして捉える研究による。これは，いわゆる空間論的転回の１つの契機となったルフェーブル（Lefebvre, H.）の「空間の生産」論[2]に依拠するものである。このような発想に基づく授業は，既に中学校社会科地理的分野においては提案されている[3]。しかし，同じ「地域」を学習対象とする小学校社会科地域学習（以下，小学校地域学習）では，未だ提案されていない。これまで小学校地域学習に関する主な授業研究は，学習指導要領及び準拠版教科書（以下，「教科書」に基づく「個人の側からのわかり方」に留まる地域学習への批判として，「社会（システム）の側からのわかり方」からも捉え直すことを通して，社会を広い視野から理解させる小学校地域学習論を提案してきた[4]。これらの提案は，社会科教育系の学会を中心に，社会科の原点である「社会研究（Social Studies）」の論理に基づき子供に社会を客観的かつ冷静に見る眼を保証する内容として高く評価されてきた。しかし，地域社会が絶えず変化したり，互いに影響を与えたりしているという社会空間の変容や空間相互の関係性等を理解させる小学校地域学習論は未だ提案されていない。社会科地理教育の目標が，「地域」を手段として科学的な見方・考え方を養い，私たちが生きる現代社会の特質や本質を適切に理解させること[5]であるならば，小学校地域学習でも同様に，社会空間の変容や空間相互の関係性を理解させる小学校地域学習論が求められよう。

このような問題意識を基づき，本研究では，これまで提案されてきた小学校地域学習論の成果を踏まえつつ，新たな視点として「空間の生産」論を組み込んだ小学校地域学習の授業モデルを開発することを目的とする。

Ⅱ　社会空間の変容と「空間の生産」論

空間を所与のものと捉えず，発生，変化したり，互いに影響を与えたりするものとして捉える研究は，1980年以降，ハーヴェイ（Harvey, D.）[6]やソジャ（Soja, E.）[7]といったポストモダンの文化・社会地理学者が，空間は社会的構築物であり，かつ社会も空間的に構築されるとし，空間論的転回を提唱したことに確認することができる。これらに関してルフェーブル（Lefebvre, H.）は，こうした社会空間の生産を理解するために，「空間的実践」，「空間の表象」，「表象の空間」という三つの空間の次元を認識することを提唱している[8]。「空間的実践」とは，「知覚される世界」，すなわち高速道路や家屋の配置などといったそれぞれの社会構成体を特徴づける特定の場所や空間配置などの物質的な空間次元である。また「空間の表象」とは，知・記号・規範といった空間の言説に関わる空間の秩序であり，科学者や都市計画家，技術官僚等の空間を構想する知識の専門家が知の技法を生かし，都市計画や地図作成等において，意識的に構想される空間次元である。そして「表象の空間」とは，象徴・映像・イメージを介

して直接「生きられる空間」，すなわち芸術家や文学者が作品を通して表現する空間であり，人々が映像や象徴を介して，直接に生きられる経験の空間次元である。ルフェーブルは，この三つの次元がたがいに対抗し矛盾しあいながら，現実の社会空間を生産していると捉えた[9]。このようなルフェーブルの主張は，今日，地理学や社会学等をはじめとして人文・社会科学において議論を活性化させる契機となっている。例えば，神田は和歌山県和歌山市を事例に，戦前の和歌山市における郷土やナショナリズムといったアイデンティティに関わる政治的な次元と観光空間化の関係性に焦点をあてて，その空間の生産過程を明らかにした[10]。具体的には，戦前期における和歌山市の観光空間化は，多様な文脈（交通機関の発達，市域の拡張，離郷や帰郷といった移動，郷土芸能運動，都市美運動，ナショナリズムなど）や，多重の空間スケール（大阪と和歌山市，和歌山市と臨海部，和歌浦と新和歌浦，東京と和歌山市，紀州と日本など），そして立場の異なる主体（観光資源，行政，文筆家など）が重層的に関係するなかで推進されていったことを明らかにした。一方，澤・南埜はインドのバンガロール近郊農村を事例に，その変容を空間スケールの社会・経済システムとの相互作用という視点で明らかにした[11]。具体的には，グローバル化によってローカル・スケールである農村領域がナショナル・スケールやリージョナル・スケールなどの上位の空間スケールにより大きな影響が与えられている（脱領域化）一方で，ローカル・スケールである農村領域が，空間の上位スケールへの統合が進むほど，統合された空間のなかでの生き残りのため個々のローカルな条件にあわせた機能特化を迫られている現実（再領域化）を明らかにした。

このような社会空間の様相は，今や特定の場所だけで生じているわけではない。グローバリゼーションの進展に伴い，特定の国や地域を問わず，どの地域社会でも見られるようになった。本研究では，「空間の生産」論に基づく人文・社会科学の成果を踏まえ，社会空間を重層的・階層的な構造を特徴とし，異なった空間スケールの相互作用によって，絶えず変容を繰り返している動態的なものと捉え，論を進めていくこととする。

Ⅲ 「空間の生産」論を援用した社会科教育研究

これまで「空間の生産」論を援用した社会科教育研究は，授業開発研究と授業分析研究の２つの領域で見られる。前者に関しては，吉水や佐藤の研究が該当し，後者には永田の研究が該当する。

吉水の研究[12]では，「地域」を，所与のものではなく生産されたものであると捉えることが重要であるとし，空間と時間あるいはその組織化が，その社会によって作り出される社会的生産物であるという前提をもつ地理的スケールの論理と空間の重層性や階層性，異なったスケール間の関係性を読み解くことでその本質が見えてくるというマルチ・スケールのアプローチの論理を組込んだ中学校地理的分野の授業モデルを提案している。具体的には，高知市春野地区を事例に，農業生産から食料消費までを１つの体系として捉えようとするフードシステム論を空間に投影し，空間的プロセス，スケールの重層性，スケール間の関係性を理解させる社会科地理授業を開発した。

一方，佐藤の研究[13]では，これまで社会科で観光をテーマとして取り上げた実践が，観光地を所与のものとして理解させていることを指摘した上で，アーリ（Urry, J.）の「観光のまなざし」論[14]に基づき，観光地が形成されるプロセスこそ理解させるべきであると主張した。そして，その主張に基づき小学校第５学年産業学習「観光産業」を題材に授業モデルを開発し，その有効性を明らかにした[15]。佐藤の研究は，吉水のように「空間の生産」論を直接的に援用しているわけでは無い。しかし，空間的プロセスに着目し，その理解をめざした初等社会科における授業開発研究として位置づけられよう。例えば，「空間の生産」論を観光研究に援用した神田の研究方法とも共通点が多く，観光空間が形成されるプロセスを多面的・多角的アプローチによって空間を動態的に明らかにする手法は，平成20年版小学校学習指導要領解説社会編（以下，学習指導要領）が求める基本方針[16]に応える内容となっている。

後者に関して，永田の研究[17]では，「空間の生産」論を分析フレームワークとして，大正自由

教育期における地理教育実践を分析している。具体的には，教科書に描かれている空間編成のあり方を忠実に教室内で再生産しようとする「空間の表象」型実践，教科書に縛られず世界や日本の姿を独自に描こうとする「表象の空間」型実践，両者の中間に位置し，両者を乗り越えようとする空間的実践の3つに分類した。そして，大正自由教育期にはこれら3つの類型の実践が見られたが，昭和初期には「空間の表象」型が強化され他を圧倒していく中で，「表象の空間」型は，地理教育としては姿を消すものの郷土教育実践に受け継がれていったことを浅草尋常小学校における郷土教育実践を対象に取り上げて論証した。

これらの先行研究のうち，特に本研究に係わる前者に該当する2つの研究は，空間が絶えず再編成される存在であるという前提のもと，空間が形成・変容するプロセスを理解させることに重点を置いている点に特質を見出すことができる。

それでは，実際に多くの教室で使用されている「教科書」では，「地域」がどのように取り上げられ，「地域社会」の何を学習する構成となっているのだろうか。小学校地域学習における「教科書」の内容構成を見てみよう。

Ⅳ 小学校地域学習の特質と課題：行為の表面的理解と「表象の空間」に基づく授業構成

学習指導要領[18]では，地域学習の内容について「地域の産業や消費生活の様子，人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし，地域社会の一員としての自覚をもつようにする。」という目標を踏まえ，「地域の人々の生産活動や販売活動の様子には特色があることや，県（都，道，府）内には特色ある産業があること」等について理解を深めることが求められている。実際に，「教科書」[19]では，宮城県仙台市を事例に，地域に存在する農家または工場の仕事を見学や調べ学習等を通して理解する内容構成となっている。具体的に小単元「農業の仕事」では，「農家では，まがりねぎをおいしくつくるために，どのような仕事をしているのでしょうか。」という学習問題のもと，①ねぎの栽培方法，②ねぎづくりの苦労や工夫，③ねぎの出荷・流通について学習する構成となっている。このような「教科書」に基づく学習の特質は，農業または工場に従事する人々の行為（「工夫や努力」）と仕事の事実（内容）について，「具体的な観察」を通して共感的に理解し，地域の人々の生産活動や販売活動の様子の特色を理解させようとする点に見出すことができる。換言すれば，社会に生きる個人の側の視点に寄り添い，そこから社会について認識させようとする，いわば「個人の側からのわかり方」に基づく社会（地域）研究となっている[20]。このような学習の課題は，生産活動や販売活動に従事する地域の人々の具体的な行為は理解できても，行為の背後に潜む社会的要因やその意味を理解することができず，表面的な理解に留まる点にある。これらの課題を克服するためには，「個人の側」から捉えた行為（「工夫や努力」）の背後に潜む要因やその意味を「社会（システム）の側」から捉えなおさせることが重要である。具体的には，「なぜ，人々は様々な工夫や努力を行っているか。」その理由を問えばよい。このような学習を意図的に組み込むことで，農業または工場に従事する人々の行為（「工夫や努力」）を科学的に理解することができる[21]。このように具体的な人物から社会のしくみを理解させる方略は，小学校社会科学習の特徴的な視点であると言えよう。その際，既に先行研究で提案されているように，個人と社会の両面から行為の意味を捉えさせることが重要である。また，特に直接経験が十分に可能な小学校地域学習では，社会科授業の仮説－検証過程において最も重要な方法と捉えられている「観察による証明」[22]に基づいて展開することで，より確かで納得的な理解を図ることが期待される。

一方，このような「教科書」の内容は，社会空間を所与のものとしてではなく，重層的・階層的な構造を特徴とし，異なった空間スケールの相互作用によって，絶えず変容を繰り返している動態的なものとして理解させる構成となっているのだろうか。「空間の生産」論から分析すれば，以下の2点が課題として指摘できる。第一に，地域社会（空間）が所与のものとして静態的に取り上げられている点である。具体的には「仙台では100

年以上前からまがりねぎが作られている。」という事実のみが示されるに留まり，「なぜ，仙台でまがりねぎが作られるようになったのか。」や「なぜ，仙台では今もまがりねぎを作り続けているのか。」等，空間的プロセスや事実の背後にある様々な要因を絡めて動態的に地域社会（空間）を理解する構成となっていない。ルフェーブルの言葉を借りれば，地域社会（空間）を「表象の空間」からのみ記述するに留まっており，「空間的実践」，「空間の表象」の空間次元から捉えさせる構成となっていない。上述したように，我々が生きる現代社会は，絶えず他次元の空間スケールの影響を受けながら脱領域化したり，再領域化したりして動態的に変容している。具体的には，上位スケールへの統合が進むほど，統合された空間のなかでの生き残りのため個々のローカルな条件にあわせた機能特化を迫られている。このような現象は，ある特定の地域にのみ生じているものではなく，わが国のどの地域社会でも見られる現象であろう。そうであるならば，「地域」を手段にして現代社会の特質や本質を理解させるためには，空間的プロセスや空間相互の関係性に着目し，空間の動態的な変容を捉えさせることが重要である。これらの課題を克服するためには，地域住民として生きられる社会空間（「表象の空間」）を「空間的実践」，「空間の表象」の空間次元から捉えさせたり，地域社会（ローカル）の事象をナショナルやグローバル・スケールといった広い空間スケールから捉え直させたりする学習を意図的に組込む必要性が指摘できる。特に，空間的プロセスについて詳細に検討させるためには，例えば，空間が形成される過程を地理（自然）的視点からのみならず，歴史・経済・社会等，複数の視点から多面的に考察する学習を意図的に組み込むことが重要である。第二に，現代社会は様々な空間スケールの相互作用によって成立しているが，「教科書」では空間スケールの相互作用やその重層性・階層性を捉えさせる展開となっていない点である。具体的には，ある地域の農業は，グローバル，ナショナル，ローカル等，様々な空間的スケールが相互に影響し合いながら成立している。しかし，「教科書」では，異なったスケール間の影響に関する記述はほとんど見当たらず，あたかも地域の農業が他の社会空間とは無関係に成立しているかのような印象を与える記述となっている。現代社会が，他地域との社会関係や相互関係が世界規模で強まることによって，社会空間が絶えず創出・編成・再編成されている社会であるという前提を踏まえれば，地域社会に見られる社会的事象を異なる空間スケールから捉え直したり，事象の背後に潜む要因を多面的に考察したりする学習もまた意図的に組込む必要性が指摘できる。

以上，「教科書」の行為の表面的理解と「表象の空間」に基づく授業構成の特質と課題を，行為の科学的理解及び「空間の生産」論から指摘し，改善の方向性について論じた。改めて，これらを社会空間の変容を捉えさせる小学校地域学習の授業設計の視点として提示すれば，以下のように整理できる（第１表）。

第１表　授業設計の視点

視　点	下位の視点
行為の科学的理解	個人と社会の両面からのアプローチ
「空間の生産」論	空間的プロセス
	空間の重層性や階層性
	異なったスケール間の関係

（筆者作成）

Ⅴ「空間の生産」論を組み込んだ小学校地域学習

ここでは，上述した２つの授業設計の視点に基づき社会空間の変容を捉えさせる社会科授業を第３学年地域学習「梨農家ではたらく人々（筑西市関城地区）」を想定して開発する。

学習指導要領[23]では，社会的事象に関する基礎的・基本的な知識，概念や技能を確実に習得させ，それらを活用する力や課題を探究する力を育成する観点から，各学校段階の特質に応じて，習得すべき知識，概念の明確化を図ることが基本方針として示されている。また，それらを習得させる際，作業的，体験的な学習や問題解決的な学習を一層充実されることも指摘されている。

本研究ではこれらを考慮し，岩田の知識論[24]を参考に子供に習得させたい知識を構造図（第１図）として整理するとともに，それらを「観察に

よる証明」を通して，体験的・問題解決的に理解させることを重視した授業モデルを開発する。

1　単元目標（知識目標）

第１次：［産地形成に関わる空間的プロセスの認識］筑西市関城地区は，全国有数の梨の生産地である。筑西市で梨栽培が盛んなのは，梨栽培に適した自然環境，先人の貢献による産地形成，自治体による積極的な振興等により，市場における高評価や安定した収益が保証されているからであることを地理（自然），歴史，経済，社会的視点から考察し，理解することができる。**【空間的プロセス，異なったスケール間との関係性】**

第２次：［行為の背後に潜む社会的要因や意味の科学的認識］関城地区の梨農家が様々な工夫や努力（労働力の分散，出荷時期の調整，複数の方法による栽培，出荷先の選定）をしているのは，収益を継続的・安定的に得るためであることを地理（自然），経済，社会的視点から考察し，理解することができる。**【異なったスケール間との関係性】**

第３次：［空間の重層性・階層性やスケール間の関係性の認識］稲城市，世羅市，下妻市の農家が商品のブランド化や６次産業化をめざしているのは，農作物の出荷量や農業就業者人口の減少，就業者の高齢化，そしてグローバル化に伴う農作物の輸入・輸出の自由化等，様々な直面する問題の中で，商品価値を高め，確実に利益を上げることを通して，生き残るためであることを政治，経済，社会的視点から考察して理解するとともに，今後，筑西市の農家が生き残っていくための解決策を，稲城市，世羅市，下妻市の事例をもとに考えることができる。**【空間の重層性や階層性，異なったスケール間との関係性】**

2　単元の概要

本授業モデルは，小学校地域学習において行為の科学的理解と「空間の生産」論の２つの視点に基づき授業を構成すれば，「地域」を手段にして社会空間の変容や空間相互の関係性を理解させることができるであろう，という仮説に基づき開発された。なお，「理解」の中身には，学習指導要領が求める「地域の人々の生産活動や販売活動の様子には特色があることや，県（都，道，府）内には特色ある産業があること」に関わる内容も含んでいる。具体的に３つの段階を通して，上述した目標を達成する単元を提案する。

第１段階は，産地形成に関わる空間的プロセスを認識する段階である（第１次）。ここでは，まず筑西市で栽培されている農作物の中でも，子供の身近な生活空間である関城地区の梨は，県内第一の生産地であり，国内有数の作付面積であるという事実から「どうして，筑西市の中でも関城地区では，梨栽培が盛んなのだろうか。」という単元を貫く学習問題を把握する。次に，学習問題に対して，予想・仮説を設定し，資料による調べ学習やゲストティーチャー（観光協会の方）へのインタビューを通して仮説を検証する。小学校地域学習では一般的に，上述のような学習問題に対して，「T 市で○○が盛んなのは，自然環境が適しているからである」というように，地理（自然）的視点からのみ理解を図ろうとするケースが多い。しかしそれは，地域社会の特質を一面的にかつ静態的に捉えさせることを意味している。本研究ではこれらの改善を図るため，産地が形成されていく空間的プロセスを地理（自然）的視点に加え，時間軸（歴史的視点）から捉えさせたり，価格や消費者ニーズ等の経済や社会的視点からも多面的に捉えさせたりすることを通して，空間的プロセス，異なったスケール間との関係性の理解をめざす。

第２段階は，行為の背後に潜む社会的要因や意味を科学的に認識する段階である（第２次）。ここでは，実際に梨農家を営む A さんの農園を見学することを通して，梨の栽培方法や梨農家の仕事，生産－販売に係わる一連の行為（苦労・工夫）の意味を観察・インタビューを通して理解する。具体的には，「どうして，『幸水』という品種をたくさん栽培しているのか。」，「どうして，価格が安定している『幸水』だけでなく，他の複数の品種も栽培しているのか。」，「どうして，露地栽培の他にビニルハウスでも梨を栽培しているのか。」，

第１図　開発単元の知識の構造　（筆者作成）

「どうして，収穫したほとんどの梨を農協や市場に出荷するのか。」等，見学を通して抱くであろう子供の素朴な疑問について農園経営者Ａさんにインタビューすることを通して，関城地区の梨栽培の特色やＡさんが行っている行為の意味，またその行為の背後に潜む社会的要因を個人と社会の両面から多角的に捉えさせることをめざす。このような展開は，個人または地域社会という小さなスケールがより大きな社会や空間スケールによって影響を受けながら成立している現実を理解させることも意図している。

第３段階は，空間の重層性・階層性やスケール間の関係性を認識する段階である（第３次）。ここでは，まず1990年以降，関城地区における梨の品種別栽培面積と出荷量がともに減少している事実を把握した上で，現在筑西市の梨農家が直面している問題とその理由をローカル・スケールのみならず，より大きいナショナル・スケールからも捉えさせる。次に，これらの重層性・階層性という特徴をもつ上記の問題に対して，異なったスケール間，特に小さいローカル・スケールが，生き残りをかけて，個々のローカルな条件の中でナショナルやグローバル・スケールといった大きいスケールに対してどのような取り組みを行っているのかを，稲城市・世羅町・下妻市の３地域の事例を通して理解させる。このような学習を通して，異なった空間の重層性・階層性やスケール間の関係性を認識させることをねらいとしている。最後に，３地域の事例から理解したことをもとに，今後，関城地区の梨栽培が継続的・安定的に生き残っていくために有効だと考えられる解決策について考える。このような地域が抱える課題に対して未来予測・価値判断をさせる学習は，初等段階から異なったスケール間の関係のうち，ローカル・スケールがナショナルやグローバルといったより大きなスケールに対してどのような影響を及ぼしうるのか，という視点を獲得するとともに，社会科教育の究極的な目標である市民的資質の育成に寄与することを意図して組み込んでいる。

３　展開（全12時間）

次	時	教師の指示・発問（●）	教授・学習過程	■習得させたい知識〈視点〉 →予想される児童の反応	資料
〈第１次〉産地形成に関わる空間的プロセスの認識	1	●「筑西市のおもな農作物（地図）」を見て，気づいたこと，思ったことを発表しなさい。	T：発問する C：調べ，発表する。	→町探検で水田が広がっていた場所には，米が栽培されている。また，米作りは市全体で行われているようだ。 →昭和地区辺りでは，スイカがたくさん栽培されている。 →市内では他にも，トマトや梨，キュウリなども栽培されている。 →私たちが住んでいる関城地区では，梨がたくさん栽培されている。	①
			T：説明する	■関城地区は，県内一の梨生産地であり，国内有数の作付面積を誇っている。	②
		●どうして，筑西市の中でも関城地区では，梨作りが盛んなのだろうか。	T：発問する C：予想する	→仮説１…関城地区は梨作りに適した環境だからかな。 →仮説２…関城地区では昔から梨作りが盛んだったからかな。 →仮説３…関城地区の梨は他の産地の梨と比べて高値で売るからかな。	
		●学習問題に対する予想を書きなさい。 ●予想を発表しましょう。	T：指示する C：発表する		
	2	●仮説１について資料をもとに調べていこう。 **（空間的プロセス，ローカル）**	T：指示する C：調べる		
		●梨作りは，どのような環境に適しているのだろうか。	T：発問する C：調べる	■梨栽培は，昼夜の寒暖差が大きく，年平均気温12～16℃，年間降水量1,200～2,000㎜の条件に該当する環境に適している。	③
		●関城地区は，梨作りに適した環境なのだろうか。	T：発問する C：調べる	■関城地区は，昼夜の寒暖差が大きく，年平均気温13.9℃，年間降水量1,230㎜で梨栽培に適した環境である。	
		●仮説１について，わかったことをまとめなさい。	T：指示する C：まとめる	■**【下位の説明的知識1-1】**〈地理（自然）的視点〉	
	3	●仮説２について，筑西市観光協会の方にインタビューを通して確認してみよう。 **（空間的プロセス，ローカル）**	T：指示する		
		●関城地区では，いつから梨を栽培するようになったのだろう。	T：発問する C：調べる	■関城地区では，1859年（安政６年）から梨栽培が始まった。具体的には，旅人宿を経営していた西村七郎平が人々の暮らしを向上させるために特産物となる換金農作物の開発・普及を考え，梨栽培を行ったことがきっかけであった。	④
		●西村七郎平さんが梨作りを始めた後，どのようにして梨作りを始める農家が増え，日本を代表する生産地になっていったのだろうか。	T：発問する C：筑西市観光協会の方に聞く	■もともと関城地区は，水稲栽培や養蚕が生業の中心で立地上（台地），水田を所有する農家が少なく，多くの農家は収入に恵まれなかった。しかし，梨栽培が行われるようになり，貴重な収入源が確保できるようになるに従い，梨を栽培する農家が増え，梨はこの地域の特産物となっていった。明治時代以降は，自治体によ	

				り梨栽培が振興されてきた。1960年代以降に梨生産が拡充され，その後も水田の果樹転作などにより，国内有数の作付面積を誇る大生産地になり，現在もその地位を維持している。 ■【下位の説明的知識1-2】〈歴史的視点・社会的視点〉	
		●仮説２について，わかったことをまとめなさい。	T：指示する C：まとめる		
	4	●仮説３について，資料やインターネットで調べていこう。 **（空間的プロセス，異なったスケールとの関係性，ローカル）**	T：指示する		
		●関城地区ではどのような品種の梨を作っているのだろうか。	T：発問する C：調べる	■関城地区では，「幸水」，「豊水」，「あかづき」，*「新高」，*「にっこり」，*「恵水」等の品種を栽培している。 *は県オリジナル品種	⑤
		●茨城（筑西）産の梨の値段と他の産地の梨の値段を比べてみよう。	T：指示する C：調べる	■地元スーパーで，茨城産の「幸水」は398円，他産地の「幸水」は198円で販売されていた。〈経済的視点〉	⑥
		●最も高値で取引されている品種は何だろうか。	T：発問する C：調べる	■「新高」（贈答用）…１玉（9L）2500円。〈経済的視点〉	⑦
		●仮説３について，わかったことをまとめなさい。	T：指示する C：まとめる	■【下位の説明的知識1-3】〈社会的視点・経済的視点〉 ■【説明的知識１】	
〈第２次〉行為の背後に潜む社会的要因や意味の科学的認識	5	●前回までの学習を振り返りましょう。 ●関城地区の梨はどのように作られているのだろうか。梨農家を営むＡさんの農園に見学に行こう。見学の際に，Ａさんに聞いてみたい質問をワークシートに書きなさい。 ●農家の方に聞いてみたい質問を発表しなさい。	T：指示する T：指示する C：まとめる T：指示する	■省略 →① どのような品種の梨を栽培しているのだろう。 →② １年で一番忙しい時期はいつ頃だろう。 →③ 美味しい梨を作るために工夫していることはどんなことだろう。 →④ 梨を収穫した後，どこに出荷しているのだろう。等	
	6 7	●梨の作り方やその他，梨農家のＡさんに聞いてみたいことを質問しよう。 **（異なったスケールとの関係性，ナショナル，ローカル）**	T：指示する C：Ａさんに質問し，説明を聞く *以下，同様	→どのようにして梨を作っているのですか。 ■梨栽培は，10月下旬から11月中旬までに行われる元肥（寒肥）から始まる。以降，剪定→誘引→摘蕾・摘花→受粉→摘果→収穫→選果の順で栽培される。【栽培方法】 →どのような品種の梨を栽培しているのですか。 ■Ａさんの農園では「幸水」，「豊水」，「新高」，「新興」の４種類の梨を栽培している。この地域の農園では栽培面積の50％以上で「幸水」を栽培している。【①】 →どうして，この地域では「幸水」をたくさん栽培しているのですか。 ■【下位の説明的知識2-1】〈経済的視点，社会的視点〉 →どうして，価格が安定している「幸水」だけでなく，他の複数の品種も栽培しているのですか。 ■【下位の説明的知識2-2】〈経済的視点〉 →どうして，露地栽培の他にビニルハウスでも梨を栽培しているのですか。 ■【下位の説明的知識2-3】〈経済的視点，社会的視点〉 →１年で一番忙しい時期はいつ頃ですか。 ■７月中旬～10月中旬の収穫・出荷時期が最も忙しい時期である。【④】 →その忙しさをどのようにして，乗り切っているのですか。 ■家族・親戚の他に臨時労働者を雇って忙しさを乗り切っている。 →梨栽培で工夫していることはどんなことですか。 ■安定した収穫量と品質を維持するために４月～10月にかけて15回程度の消毒作業を行う。また，梨を生のまま食べられるように，独自配合の堆肥や有機物肥料等を使った土づくりや，減農薬栽培など，味や安全の追求にこだわって作っている。等【③】 →梨を収穫した後，どこに出荷しているのですか。 ■収穫した梨のほとんどを農協や市場に出荷し，一部を宅配や直売所で販売する。【④】 →どうして，収穫したほとんどの梨を農協や市場に出荷するのですか。 ■【下位の説明的知識2-4】〈地理（自然）的視点，経済的視点，社会的視点〉	⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯
	8	●梨農家のＡさんの農園を見学して分かったことや気づいたこと（主に，仕事の内容，工夫や努力とその理由など）をまとめなさい。 ●まとめたことを発表しなさい。	T：指示する T：指示する C：発表する	■【説明的知識２】	

〈第3次〉空間の重層性・階層性やスケール間の関係性の認識	9	●前回，Ａさんの梨農園を見学してわかったこと・気付いたことを発表しましょう。 ●このグラフからどのようなことが読み取れますか。 （空間的プロセス，ローカル） ●どうして，関城地区では1990年以降，梨の栽培面積と出荷量が減っているのだろうか。 ●学習問題に対する予想をノートに書きなさい。 ●配付する資料をもとに予想したことが正しかったか確かめなさい。（ナショナル）	T：指示する C：発表する T：発問する C：読み取る T：発問する C：予想する T：指示する C：調べる	■省略 →1990年以降，全体的に梨の栽培面積が減っている。 →栽培面積に関して，1975年には最も多かった「長十郎」が1995年に無くなり，それ代わりに「幸水」と「豊水」がたくさん作られるようになった。 →出荷量は急激に増加したり，減少したりしている年があるが，全体的に減少している。 →農家の仕事が大変だからではないかな。 →農業をしようという若者が減ったからではないかな。 ■農業就業人口と農業戸数は，年々減少している。また平均年齢は高齢化が進んでいる。その背景には後継者不足（農業を職業として選択する人の減少），重労働で得られる農業収入と農業以外で得られる収入との差が埋まらないからである。〈社会的視点〉	⑰ ⑱ ⑲ ⑳
	10	●このまま農業就業者人口が減少し，高齢化が進めば，関城地区の梨はどうなるだろうか。 （異なったスケールとの関係性，ナショナル，ローカル） ●このような状況を改善するために，稲城市（東京都）や世羅町（広島県），下妻市（茨城県）では様々な工夫をしています。それぞれ，どのような取り組みをしているのか調べてみましょう。 （異なったスケールとの関係性，グローバル，ナショナル，ローカル）	T：発問する C：発表する T：指示する C：資料や映像をもとに取り組みを読み取る	→さらに梨の栽培面積と出荷量が減少し続ける。 ■稲城市（東京都）では，ブランド戦略として高品質生産を行うための徹底した栽培技術の普及と生産者組織における厳しい検査基準の設定，農協によるチラシや新聞折り込み広告の作成・配付といった広報活動を通じて，稲城産の梨に付加価値をつけた販売を行っている。〈経済的視点，社会的視点〉 ■世羅町（広島県）では，生産者・自治体・農協の連携による「世羅高原6次産業ネットワーク」を設立することを通して，地域産品・加工品の開発や新事業の創出など農業振興に取り組んでいる。〈政治的視点，社会的視点〉 ■下妻市（茨城県）では，地元の下妻甘熟梨をリキュールや梨ジャム，大福餅へと加工・販売したり（６次産業化），アジアの富裕層を対象に高級梨として輸入したりすることを通して販路の拡大に取り組んでいる。〈政治的視点，経済的視点〉	㉑ ㉒ ㉓
	11	●どうして，稲城市や世羅市ではブランド化をめざしているのだろうか。 （空間の重層性や階層性，異なったスケールとの関係性，グローバル，ナショナル，ローカル） ●どうして，世羅市や下妻市では，６次産業化をめざしているのだろうか。 （空間の重層性や階層性，異なったスケールとの関係性，グローバル，ナショナル，ローカル） ●稲城市・世羅町・下妻市がブランド化や６次産業化を目指している理由をまとめなさい。	T：発問する C：予想する T：説明する T：発問する C：予想する T：説明する T：指示する	→農作物の価値を高めることで，消費者に高値で購入してもらうためかな。 →農作物の価値を高めることで，市場で安定的に購入してもらうためかな。 ■【下位の説明的知識3-1】〈経済的視点〉 →自治体や農協等，様々な機関と協力することで，より良い農作物を作るためかな。 →自治体や農協等，様々な機関と協力することで，安定して販売するためかな。 →収穫した農作物をジュースやジャムに加工することで，価値を高め，そのままの状態で売るよりもたくさんの儲けをえるためかな。 ■【下位の説明的知識3-2】〈政治的視点，経済的視点，社会的視点〉 ■【説明的知識３】	㉔ ㉕
	12	●今後，関城地区の梨作りが生き残っていくためには，どのような取り組みを行っていくべきなのだろうか。これまで見てきた３つの地域の取り組みを参考に，自分の考えをまとめなさい。 （未来予測・価値判断）	T：指示する C：ノートに自分の考えを整理する	■【規範的知識】	

【資料】

①「筑西市のおもな農作物」（筑西市教育委員会 編（2014）『わたしたちの筑西』, 34p），②「筑西市の主な農畜産物の生産状況」（農林水産省 HP 茨城県筑西市基本データ「農畜産物の生産状況」），③「自然環境から見た筑西市の梨栽培」（林琢也ほか(2008)「首都圏におけるナシ栽培の存立条件」,『地域研究年報』第30号, pp.33-68をもとに筆者作成），④「歴史から見た筑西市の梨栽培」（同上及び前掲①, 41p），⑤「筑西市で栽培している梨品種」（筑西市 HP），⑥「産地と梨の価格」（スーパーのチラシ），⑦「新幸」（楽天 HP），⑧「梨を育てる（１年間の主な作業）」（前掲①pp.40-41），⑨現地農家のインタビューによる，⑩「梨の農事暦（品種と収穫時期）」（前掲③），⑪「東京都中央卸売市場における茨城産梨（「幸水」）の月別入荷量と価格（2014年）」（茨城県農産物販売推進東京本部 HP），⑫～⑯現地農家のインタビューによる，⑰「筑西市における梨の品種別栽培面積と出荷量の推移」（農林水産省「果樹生産出荷統計」より筆者作成），⑱「農業就業人口と平均年齢の推移」（農林水産省 HP「農業センサス」），⑲「農家戸数の推移」（農林水産省 HP「農業センサス」），⑳「後退する農業」（生源寺眞一(2011)『日本農業の真実』, 筑摩書房），㉑「東京都稲城市の取り組み」（宮地忠幸(2006)「改正生産緑地制度下における都市農業の動態―東京都を事例として―」愛知教育大学地理学会『地理学報告』第103号,pp.1-16.），㉒「広島県世羅町の取り組み」（世羅町 HP 及び平成23年度地域活性ガイドブック），㉓「茨城県下妻市の取り組み」（NHK「“甘熟梨”で販路の拡大めざす」2013年10月４日放映），㉔「第６次産業化する農業」（上田祥子 編(2013)『農業ビジネスマガジン』Vol.3, イカロス出版）㉕同上.

Ⅵ　結論

本研究の目的は，近年，社会科地理教育で求められている地理学習及び地域学習の動向を踏まえ，地域社会が絶えず変化したり，互いに影響を与えたりしていることを理解させる小学校地域学習の授業モデルを開発することであった。本研究の成果は，２つに集約される。第一に，社会空間の変容を捉えさせる小学校地域学習の授業設計の視点を先行研究から整理し，それを分析フレームワークとして従前の「教科書」に基づく小学校地域学習の課題及び改善の方向性を明らかにしたことである。そして第二に，第一の成果を踏まえ，「産地形成に関わる空間的プロセスを認識する段階」，「行為の背後に潜む社会的要因や意味を科学的に認識する段階」，「空間の重層性・階層性やスケール間の関係性を認識する段階」という３つの段階を経て，社会空間の変容を捉えさせる小学校地域学習の授業モデルを示したことである。これらは，社会空間の変容を多面的・多角的に考察する社会科授業であり，学習指導要領が求める考察方法と重なる。ゆえに今日の社会経済システムを適切に理解させることをめざす社会科授業開発に寄与する点は少なくないと考えている。

今後は，開発した授業モデルの有効性を検証していく必要がある。

【註】

⑴　吉水裕也（2012）「地域の形成プロセスを重層的に認識させる地理教育へ」，日本地理教育学会『新地理』第60巻第１号，pp.83-84.

⑵　ルフェーブル，H.（Lefebvre, H.）（斉藤日出治訳）（2000）『空間の生産』青木書店，pp.75-83.

⑶　吉水裕也（2011）「地理的スケールの概念を用いたマルチ・スケール地理授業の開発－中学校社会科地理的分野『身近な地域の調査「高知県春野地区」』を題材に－」，日本地理教育学会『新地理』第59巻第１号，pp.1-15.

⑷　例えば，岡崎誠司（2009）『変動する社会の認識形成をめざす小学校社会科授業開発研究―仮説吟味学習による社会科教育内容の改革―』風間書房，pp.45-72. や角田将士（2009）「小学校社会科学習の改善(2)― ４年単元『美山町を通して過疎化を考える』の開発―」，立命館大学『立命館産業社会論集』第44巻第４号，pp.149-158.などがある。

⑸　草原和博（2004）『地理教育内容開発研究－社会科地理の成立根拠』風間書房，pp.151-159.

⑹　ハーヴェイ，D.（Harvey, D.）（吉原直樹監訳）（1999）『ポストモダニティの条件』青木書店，pp.257-307.

⑺　ソジャ，E.（Soja, E.）（加藤政洋ほか訳）（2003）『ポストモダン地理学』青土社，pp.101-123.

⑻　前掲(2)，pp.75-83.

⑼　前掲(2)，pp.621-627.

⑽　神田孝治（2012）『観光空間の生産と地理的想像力』ナカニシヤ出版，pp.51-72.

⑾　澤宗則・南埜猛（2006）「グローバル化にともなうインド農村の変容」，人文地理学会『人文地理』第58巻第２号，pp.125-144.

⑿　前掲(3).

⒀　佐藤克士（2012）「持続可能な社会の形成者育成としての社会科観光学習」，社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第24号，pp.21-30.

⒁　アーリ，J（Urry, J.）（加太宏邦訳）（1995）『観光のまなざし』りぶらりあ選書，pp.1-27.

⒂　佐藤克士（2013）「観光研究の成果を組み込んだ『社会科観光』の授業開発とその評価－小学校第５学年産業学習『観光産業』を題材にして－」，日本社会科教育学会『社会科教育研究』第118号，pp.1-14.

⒃　文部科学省（2006）『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版，p.3.

⒄　永田忠道（2009）「世界・国土空間編成に対峙する郷土教育カリキュラム－東京都浅草尋常小学校の『生活科』実践の場合－」，全国社会科教育学会『社会科研究』第71号，pp.11-20.

⒅　前掲(16)，pp.18-28.

⒆　北俊夫ほか編（2014）『新編 新しい社会３・４年』東京書籍，pp.70-83.

⒇　前掲(4)角田，p.151.

(21)　米田豊（2011）「産業学習：人々の工夫や努力の科学化」，全国社会科教育学会『社会科教育実践ハンドブック』明治図書，pp.57-60.

(22)　社会認識教育学会 編（2005）『改訂新版 初等社会科教育学』学術図書出版社，pp.62-63.

(23)　前掲(16)，pp.3-4.

(24)　岩田一彦（1991）「授業設計の理論」，岩田一彦編『小学校社会科の授業設計』東京書籍，pp.38-45.